

## 平成 27 年度千葉大学文学部公開講座



# 日本語の隣人たち

主催 千葉大学文学部  
後援 千葉市教育委員会  
千葉大学地域研究センター  
企画 日本文化学科

日本の周囲には、中国語や朝鮮語やロシア語といったよく知られたメジャーな言語ばかりではない、数多くの言語が話されてきました。それらは地理的に非常に近いところで話されているだけでなく、おそらく古く歴史をさかのぼれば日本人の先祖とも深い交流のあった人たちのことばであり、日本語の成立に何らかの関わりがあった可能性もおおいにあります。しかし、大多数の日本人は、それらのことばの名前すら聞いたことがありません。千葉大学日本文化学科コーラシア言語文化論講座では、そうした日本周辺のさまざまな言語を現地調査し、あるいは現地の人たちと協力して言語復興運動に貢献する活動を行ってきました。その成果の一部は、『日本語の隣人たち』『日本語の隣人たちⅡ』（ともに白水社）というCD付の本となって刊行されています。今回の講座では、日本語の最も近い隣人であるアイヌ語、中国の少数民族であり日本の西南方面の隣人であるミャオ語、北方の隣人であるカムチャツカ半島のイテリメン語を中心に、日本列島がいかに多様な言語に取り囲まれてきたかについて、現地の映像資料や現地録音した音声資料などをふんだんに使って紹介したいと思います。

日 時：2015年11月1日(日) 13:00~16:30

場 所：人文社会文化科学系総合研究棟2F マルチメディア会議室（別紙案内参照）

※当日は千葉大学祭を開催中のため、お車での入構はできませんのでご了承願います。

講 師：日本文化学科教員

対 象：高校生以上の一般市民の方

受講料：無料

申込み方法：事前に電話、FAX、E-mailなどで氏名をお知らせ願います。

なお、先着順に受け付けますが、空席状況によっては当日参加も受け付けます。

問合せ先：千葉大学文学部学務グループ

電 話：043(290)3631、2352

FAX：043(290)2356

E-mail：bhgakumu@office.chiba-u.jp

## ■ 講義内容

### 中川裕 : アイヌ語 —もうひとつの日本のことば

アイヌ語は、日本の先住民族であり日本の少数民族—アイヌによって話されてきた言葉である。現在日本以外の国で話す人はおらず、その意味で日本固有の言語でもある。かつては、北海道、樺太（サハリン）島南部、千島（クリル）列島、そして本州東北地方北部でも話されていたことが確実だが、現在、アイヌ語を母語とする人の数はごくわずかであり、アイヌ語しか話せないという人はもはや存在していない。しかし、アイヌ語やアイヌの文化を後世に伝えて行こうとする人の数は年々増えていき、音楽、芸能、工芸などさまざまな分野で活動が行われている。

アイヌ語は日本語と地続きで話されてきた唯一の他言語であり、数多くの単語が日本語からアイヌ語へ、アイヌ語から日本語へ入っている。日本人が日常的に使っている言葉の中にも実はアイヌ語起源のものがあることを知ると、ちょっとびっくりするだろう。一方、アイヌ語は日本語とは系統的にまったく別の言語であり、文法的にもおよそ日本語とは似ていない。アイヌ語がどこで生まれたのかは謎だが、その謎を解き明かすことは、とりもなおさず日本語の起源という問題にも直結する問題であろう。

千葉大学は、30年以上にわたりアイヌ語を専門科目や教養課程の語学科目として教授してきた歴史があり、アイヌ語に関しては、日本で（そして世界でも）トップの研究・教育機関である。



ゴールデンカムイ (C) 野田サトル/週刊ヤングジャンプ・集英社  
アイヌ語監修・中川裕

### 小野智香子 : イテリメン語 — 知られざるカムチャツカの大自然とともに生きることは



ヤナギランの花。茎は食料として利用された

イテリメンの人々は、日本の北海道の北東につらなる千島列島のその先、ユーラシア大陸の東端に位置するカムチャツカ半島に住んでいる。江戸時代に漂流してカムチャツカに辿り着いた大黒屋光太夫の話を知っている方も多いのではないだろうか。イテリメンの人々は、カムチャツカ半島の南端ではアイヌの人たちとも交流があったという。

カムチャツカの気候や自然は北海道のそれと似ており、

また火山や温泉が豊富で、近年観光地としても人気がある。イテリメンの人々はこの自然豊かな地に太古の昔から暮らしてきた。現在はロシアの一部となって近代化が進んでいるが、夏には山でベリーや山菜をとり、川で魚を捕り、冬のための保存食を作るという生活を今でも続けている。

イテリメン語はロシア語の方言ではなく独立した言語で、チュクチ・カムチャツカ諸語という言語グループに分類されているが、そのグループ内でもかなり異質な言語である。北隣のコリャーク語や、南隣のアイヌ語とも大きく異なっている。イテリメン語の話者は年々減り続け、現在では10人に満たないほど少なくなってしまった。いわゆる「消滅の危機に瀕した言語」のひとつである。本講義ではイテリメン語の実際の音声を聞いたりビデオを見たりしながら、日本の近くにあるにもかかわらず、ほとんど知られていないイテリメンの人々の暮らしに根付くことばと文化を紹介したい。



海岸でサケからイクラを取り出している漁師

### 田口善久：ミャオ語 — 中原に覇を競った英雄の子孫たちのことば

中国揚子江の南に広がる丘陵地域に生活するミャオ族（苗族）は、この国ではその存在を知る人は多くないものの、一千万人以上の人口を擁する一大「少数民族」である。彼らが、遠く黄河の流域である中原の覇を漢民族の祖先と争って敗れ、南へと移住したいわば「落ち武者軍団」だ




ある夏の日 — 日陰で涼んで雑談

という話がある。これは、全てのミャオ族が信じている伝説ではないが、彼らがかつては現在の居住地より東、より北にいたことは、彼らの言語の分布上の特徴から推測できる。また、あたかも中原とのつながりを示す痕跡であるかのように、ミャオ語の語彙、それもかなり基礎的と思える語彙（たとえば、「洗う」、「飲む」などの基本的動作を表す語）にも、漢語（中国語）からの借用語（外来語）がある。

ミャオ族は、現在、中国内陸部の貴州省、湖南省を中心として生活しており、漢語は生活には欠かせない。ミャオ語は消滅危機言語ではないものの、漢語はあらゆる面でミャオ族の生活に浸透しており、村の中においても話題によっては、漢語に切り換えてミャオ族どうして話をする。このような状況を見ると、強大な漢語の影響の下、ミャオ語はどのような変化をしてきたのか、漢語からミャオ語をどう守ってきたのか、知りたくなる。

本講義では、歴史言語学の手法のいくつかを使って、このような謎に挑みつつ、この言語の過去の姿を探索する。したがって、言語学の講義である。しかし、小難しい学問的術語は一切使わない。言語学も、ミャオ族も、ミャオ語も知らなくても大丈夫である。



  
**ニュ  
エクスプレス・スペシャル**
  
**日本語の隣人たち**


監修：中川裕

セテック語 月田尚美  
 ニヴフ語 丹菊逸治  
 ホジェン語 李林静  
 イテリメン語 小野智香子  
 サハ語 江畑冬生  
 ユカギール語 長崎郁  
 エスキモー語 永井佳代  
 ハワイ語 塩谷亨

台湾に、サハラに、中国に、シベリアに、カムチャツカに、  
 そしてアラスカ、ハワイに、

**私たちの知らない言葉、  
 知らない広大な  
 世界が広がっている!**

白水社 



  
**ニュ  
エクスプレス・スペシャル**
  
**日本語の隣人たちII**

中川 裕 監修 / 小野智香子 編

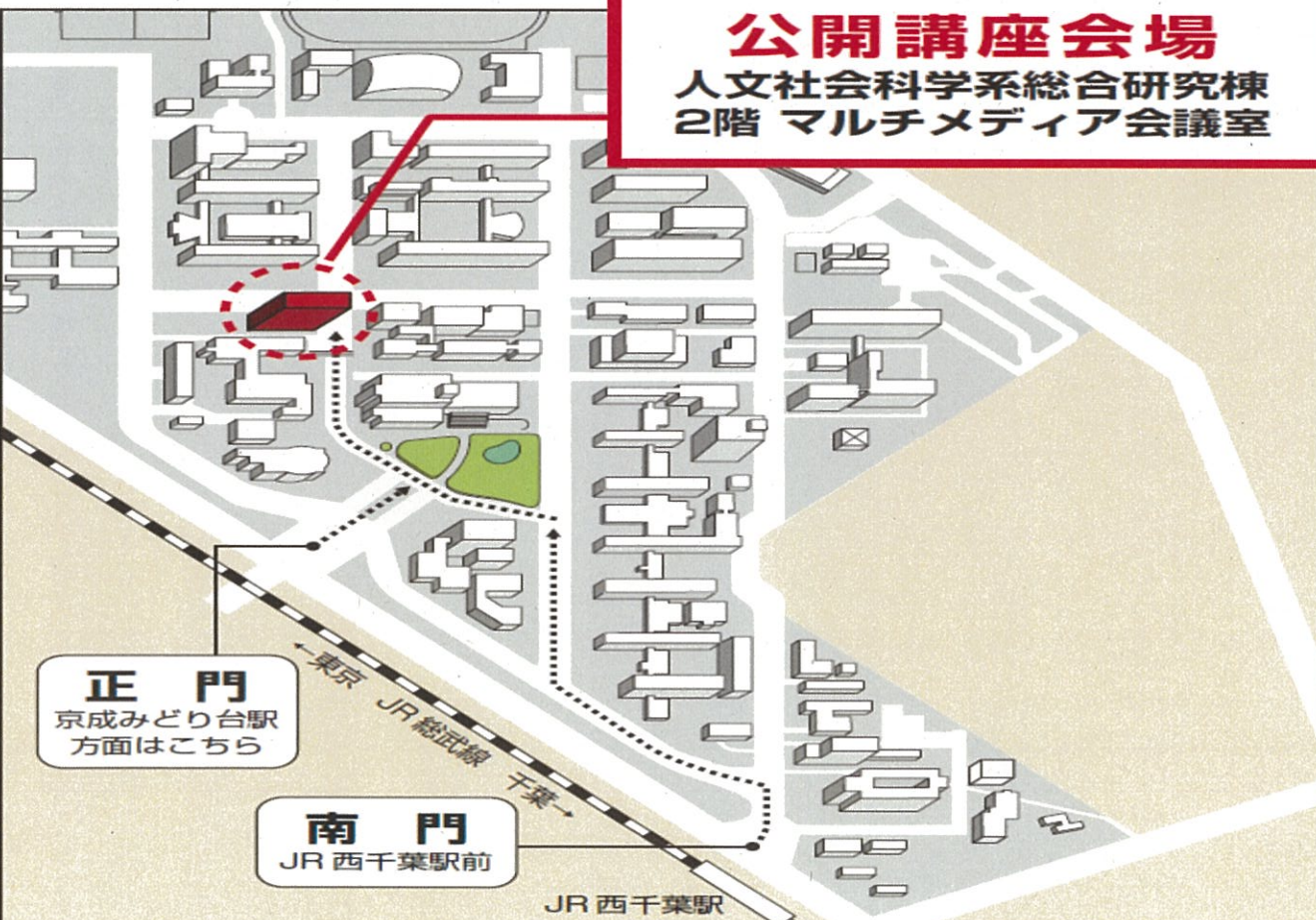
樺太アイヌ語 北原次郎太  
 アリュートル語 永山ゆかり  
 オイラトモンゴル語 バヤリタ / プリガ  
 シベ語 児倉徳和 / 久保智之  
 ソンカ語 西田文信  
 リス語 加藤高志  
 ブヌン語 野島本奈  
 小笠原語 ダニエル・ロング

まだまだあるアジアのことは  
 驚きの第2弾！

**言語の数だけ世界は広がる  
 —— 楽しみ無限！**

白水社 

**公開講座会場**  
 人文社会科学系総合研究棟  
 2階 マルチメディア会議室



**正門**  
 京成みどり台駅  
 方面はこちら

**南門**  
 JR西千葉駅前

東京 ← JR 総武線 千葉 →  
 JR西千葉駅